

Title	ミシェル・ヴィユシャンジュを読むジュネ：『スマラ』から「イビスへの手紙」へ (1)
Sub Title	Genet lisant Michel Vieuchange : Smara et «Lettre à Ibis» (1)
Author	岑村, 傑(Minemura, Suguru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.107, (2014. 12) ,p.139 (154)- 161 (132)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01070001-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ミシェル・ヴィユシャンジュを読むジュネ

—『スマラ』から「イビスへの手紙」へ

(1)

岑村 傑

Voyager, voyager, qu'est-ce que cela fait ? Depuis que Vieuchange a ensanglanté ses pieds sur ces pierres, le monde a changé, il s'est bouffi d'orgueil¹.

ジャン・ジュネの小説『花のノートルダム』のなかで、老人を扼殺した「花のノートルダム」が裁判にかけられている。弁護人は情状酌量を狙って熱弁をふるうが、それを聞く法廷は白けるばかりだ。

弁護人はまず貧民層の教育について、街の悪い手本について、飢え、渴きについて陳述し（まったく、この子をフーコー神父やミシェル・ヴィユシャンジュにでもしようというのか）、さらに、首は官能的なまでに誘惑してくるもので、人が締めるようにできているのだと主張した。要するに、頭がどうかしているのだ。[……]法廷はここまでほんくらな弁護人を呪わしく思った。ふつうだったら弁護を聞くうちに同情がわくはずで、その同情を押し殺すことが満足だというのに、それさえ許してくれない²。

弁護が感動的であればあるほど、それを斥けて裁くよろこびは大きくなる、という意表を突く見方はおき、ここで注目したいのは二つの固有名、「フーコー神父」と「ミシェル・ヴィユシャンジュ」である。どうやら悪に染まってもおかしくないところを踏みこたえた偉人であるらしい彼らは、はたして何者なのか。

それぞれの生涯についてあらましを知るのには、さほどむずかしいことではない。フーコー神父ことシャルル・ド・フーコー Charles de Foucauld は、1858年、ストラスブールの生まれ。陸軍士官となり、1883年から84年にかけてモロッコを踏査する。その後1886年に聖職の道に入り、やがてアルジェリアで信仰と現地トゥアレグ族の文化研究に打ち込む。1916年、タマランセットでイスラム神秘主義者に暗殺された。かたやミシェル・ヴィユシャンジュがブルゴーニュ地方ヌヴェールで生を享けたのは、1904年である。文学や哲学に親しみながら長じ、1930年、モロッコの南に広がるリオ・デ・オロ地域に旅立った。2ヶ月弱に及ぶ行程を経て目的地であるスマラに到達する。その帰途、赤痢に蝕まれ、26歳の若さでアガディールに没す。

このようなごく基本的な伝記的事実を押さえるだけでも、上に引いた一節の理解は進むことになる。フーコー神父とヴィユシャンジュがそこで並んで挙げられている理由が明確になるからだ。すなわち、その二つの名は、どちらも探検家、しかもモロッコの荒野、サハラ砂漠という過酷な土地に挑んだ探検家のものなのである。弁護人が被告の魂に巣くう闇のよって来たところを訴えようと口に出した「飢え」や「渇き」という言葉が、小説の語り手に、草木もまばらな灼熱の地で空腹に苛まれ一滴の水さえ甘露として味わったろう冒険者たちを想起させたにちがいない。そしてたまらず語り手は介入する。飢えだ、渇きだとわめいているが、まさか、それに屈して殺人を犯すか、それともそれに打ち勝って偉業をなすか、違いはそこだけで、「花のノートルダム」とフーコー神父やヴィユシャンジュは案外近いとでもいいたいのか、と。

さて、そのフーコー神父とミシェル・ヴィユシャンジュのうち、ジュネとの関係においてさらに進んだ検討の対象となつてしるべきは、後者である³。というのも、1943年に出版された『花のノートルダム』でその名に触れる10年前に、ジュネはそのヴィユシャンジュに関して文章を起草しているのだ。「イビスへの手紙」*« Lettre à Ibis »*である。1933年に書かれて未発表のままだったその文章は、2005年に『ル・フィガロ』紙に初出し⁴、その後、ジュネ生誕100周年の2010年に刊行された未発表書簡集『イビス

への手紙』 *Lettres à Ibis* に収録されている⁵。

「イビスへの手紙」執筆の発端は、1933年春、モロッコでの軍務を終えてフランスに戻ってきたジュネが、パリでアンドレ・プラガーヌ *Andrée Pragane*、一名イビスと出会ったことだった⁶。この自分と同年の22歳の女性にジュネは親愛の情を抱き、彼女を中心にモンマルトル界隈に集まった知識人、芸術家たちと、『イビスへの手紙』からうかがい知ることができる交流をもった。イビスが仲間とともに雑誌『若者たち』 *Les Jeunes* を創刊すると、その売り込みを買ってでて、そして自分もそこに寄稿しようと試みる。題材はあった。前年の1932年にヴィユシャンジュの旅行日誌が出版されて評判になっていたのだ。イビスに宛てた手紙という体裁を借り、ジュネはこう書き始める。「最初はあなたに、ミシェル・ヴィユシャンジュのスマラへの旅について語ることをお願いするつもりだった⁷。」

本稿の目的は、「イビスへの手紙」が二つの文脈においてもつ意味を検討することである。第一の文脈は、ミシェル・ヴィユシャンジュの探検と刊行されたその日誌の受容である。ヴィユシャンジュについて書かれた当時の記事や書評を読んでいくと、ひとりの青年の野心と行動と死がどのように同時代に受け入れられ、あるいは利用されたのかが見えてくる。その風景のなかにジュネの「イビスへの手紙」を嵌め込めば、その特異さなり凡庸さなりがおのずから浮かびあがってくるだろう。それを承け、次にジュネの文学という第二の文脈に目を転じたい。その刊行時から指摘されているように、「イビスへの手紙」がこれまでの詩編「死刑囚」に替わってジュネが書いた最初の文学的作品になるのだとしたら、それではそこにのちのジュネ作品の兆しを認めることができるのだろうか。ジュネの詩や小説に、若き日のヴィユシャンジュ体験の刻印は押されているのだろうか。

「イビスへの手紙」について、一方ではそのヴィユシャンジュ論としての価値をはかり、他方ではそのジュネ作品としての重要性を探ること、それを二重の目的として、本稿は二部構成をとる。第Ⅰ部ではミシェル・ヴィユシャンジュに的を絞り、第Ⅱ部においてはヴィユシャンジュを契機にしたジュネ読解を試みたい。

I 『スマラ』

1. 旅

まずは、ミシェル・ヴィユシャンジュの生涯とそのスマラへの旅について、さらに詳しく見る必要がある。その際、第一の典拠となるのは、ミシェルより1歳半年少の弟ジャンの言葉だろう。ジャンは自分が看とったミシェルの最期について記者たちに語り、その後手ずからミシェルの旅行ノートを編集、出版する際には、そこに「まえがき」を書いて、ミシェルの生涯を振り返っている。それが、当時の人々が無名の一青年の来歴について知るための唯一の情報源だったことは、まちがいない⁸。

さて、おもにそのジャン・ヴィユシャンジュによる「まえがき」に沿って確認するならば、あらためて、ミシェル・ヴィユシャンジュが生まれたのは1904年8月26日、ロワール川にアリエ川が合流する手前の町ヌヴェールである。父は保険会社に勤め、ヴィユシャンジュは不自由のない幼少期を過ごしたようだ。やがて文学を志すようになり、フロベールやミストラルやギリシャ詩人たちを愛読する。1922年にパリに出ると、大学に通いながら自身でも小説執筆を企て、その取材も兼ねてギリシャを訪れた際には、アクロポリスやパルテノン神殿に感銘を受けている。兵役ではモロッコも知った。そこで友人となった、のちの言語学者エミール・バンヴェニストの勧めで、ランボーやニーチェを読む。1928年からは映画のシナリオにも手を染めるが、しかし、ヴィユシャンジュのなかでは次第に文学や芸術に対する熱が冷めていくのだった。

ミシェルとジャンは、まるで分身であるかのように思考と情熱を分かちあう兄弟である。「ひとりが何かをするとき、それはわたしたち二人のためにするのであって、もうひとりとはあらためてそれをしようとは思わない、まるで自分でもうそうすることの効用をすっかり享受してしまったかのようなのだ⁹。」したがって、言葉や映像の世界に飽き足らなくなった兄の心に全身全霊を打ちこめる行動への欲求が芽生えたとき、それ

は弟のものともなった。「世界に秘められた英雄的なものすべて、神秘的なものすべて、もっと端的に言うなら人間的なものすべてが、わたしたちを惹きつける¹⁰。」

だが、いったい何ができるというのか。それを探すヴィユシャンジュ兄弟の関心を、リオ・デ・オロという地名が強くとらえはじめる。スペイン語で「黄金の川」を意味するその土地は、サハラ砂漠の西端、大西洋とモーリタニアに挟まれてモロッコの南に広がる地域の一部である。1884年以來スペイン保護領ではあったが、実質的には現地ベルベル系部族が支配し、ヨーロッパの侵入に抵抗を続けていた。当時、そこに不時着した飛行機のパイロットがモール人の捕虜となって虐殺され、あるいは身代金を要求される、という事件も起きている。リオ・デ・オロはヨーロッパ人にとっていまだ危険に満ちた未踏の地だったのだ。それは植民地帝国が世界を席卷していたこの時代にあって稀少である。実際、ヴィユシャンジュの冒険を知って『ル・フィガロ』紙はこう驚くことになるだろう。「このようなニュースにはいささか驚かされる、というのも、わたしたちはえてして、世界には人間が足を踏み入れたことのない地域などもはや存在しないと思ひ込みがちだからだ¹¹。」そのようなわずかに残された未知なる土地に向かうこと以上に、刺激的な挑戦があるだろうか。しかも、リオ・デ・オロは格別の磁力を放つ場所を蔵していた。19世紀の終わりに宗教的指導者マ・エル・アイニーンによって建設され、ヨーロッパ植民地主義への抵抗の拠点となった街、スマラである。ヨーロッパ人にとって、どこに位置するのもおぼろげにしかわからないその都は、「神秘の都 *la mystérieuse*」であった。危険、未踏、稀少、神秘、これだけ出揃えば十分だろう。「かくして、ミシェルがすでに知っていて、わたしたちの基地とすることができるモロッコの目と鼻の先に、牙を剥く人間と砂漠に立ち向かいながら確定すべき地図が、探査すべき街が、すなわち努力と危険の機会が、あるのだ¹²。」ヴィユシャンジュ兄弟の心は固まった。

1929年9月から1年をかけて入念に計画が練られ、必要な資金が集められる。結局、出発するのはミシェルひとりで、医師であるジャンは後方支

援として残り、兄の負傷や捕囚といった事態に備えることになった。1930年9月11日、アガディールの南方からまずはティズニットに向かって、ミシェル・ヴィユシャンジュは冒険の一步を踏み出す。土地に詳しいガイドたちに率いられ、現地人家族の移動に見えるように二人の女をともない、自身もバルベル人女性に変装した。武器は帯びず、大切に携えたのは、二つの腕時計と二つのコンパス、二台のカメラである。

「ぼくは歩く。ぼくの唯一の目的——歩きつづけること。ぼくにはもう昼も夜もない。唯一の欲求、到達すること。眠る場所なんてどこでもいい、どんなことにも耐えてみせる¹³。」このような高揚と決意のうちに始まった旅の苛烈さを、ヴィユシャンジュの日誌は切実に教えてくれる。太陽、砂漠、疲労、不眠、足の負傷、ガイドたちとのとりわけ報酬をめぐる悶着、ヨーロッパ人だと見とがめられ捕まるのではないかという恐怖、試練は絶えない。行程も紆余曲折を経た [SM 23 (路程図)]。ティズニットを越え、9月20日にはティギリットに着き、そこで態勢を整えて、10月3日から4日にかけての深夜にふたたび発つ。しかし、このときは隊内に負傷者が出て士気が下がったために、やむなく踵を返すことになる。10月11日にティギリットに戻り、仕切り直してあらためてスマラを目指したのが24日である。今度こそはとヴィユシャンジュは進む。歩き、らくだの鞍にまたがり、そして最後は人目を忍ぶために荷物用のかごに入り、ラクダの背にくくりつけられたそのなかで胎児のように身を丸め、じっと息をひそめながら。だが、肉体の苦痛をよそに、精神は萎えない。「しあわせだ、1キロ1キロが積み重なっていく、目的地とぼくを隔てる距離が縮まっていく。止まりたくない。眠りたくない [SM 182-183]。」11月1日、ついにその時が訪れる。「目的地とぼくを隔てる距離」は踏破され、眼前にスマラが姿を現したのだ。「12時15分。スマラ！ [SM 197]」人気なく、廃墟と化した「神秘の都」をヴィユシャンジュは歩き回り、写真を撮り、方位を調べ、街の見取り図を描いた。わずか3時間足らずの滞在だった。

そしてヴィユシャンジュは帰路に就く、「あたかも真珠をとり潜った潜水夫が急いで水面に上がろうとするように [SM 203]」。戻ったときの快

適な生活が彼を急かす。「もう風はおらず、寒い暑いもないこと。ベッドで眠ること。食べること。ほんとうに厳しかった2ヶ月間が終わり、なすべきことを果たして、そういったすべてにまた帰ること [SM 219]。」日誌は、しかし、11月13日を最後に中断した。

ジャンはティズニットで赤痢に蝕まれた兄と再会する。空路アガディールまで移送され、その移送によっていっそう疲弊して、11月30日の朝、ミシェル・ヴィユシャンジュは息を引きとった。いったい彼の旅はいつから始まっていたのか。スマラの名を初めて目にしたときなのか、何かをなし遂げなければという焦燥に憑かれたときなのか、それともさらに前、文学に耽溺した時代、恵まれた子ども時代よりもさらに前に、すでに始まっていたということはないか。旅を終えて逝った、いや旅によって逝ったヴィユシャンジュの26年の短い生涯は、その旅のために生きられたかのようにある。

2. 日誌

非業なのか天寿なのか、その死からおよそ1ヶ月が過ぎた頃、フランスの新聞数紙がミシェル・ヴィユシャンジュの快挙について報じる¹⁴。惜しみない賛辞といってよい。ある記事は、ヴィユシャンジュに若者のあるべき姿、「たちまち手軽な成功が転がり込むパルナツソス山や仲間うちの外に目先が向かわない、くたびれて、たわごとばかりの若者たちのなかにあって、復活を遂げたひとつの理想¹⁵」を見る。また、青春の冒険としてだけでなく、学術的調査として評価する記事もある。「この大胆不敵な遠征によって、ヴィユシャンジュの名は、みずからの命をなげうち科学に尽くしたフランス人たちの長い殉教史のなかに刻まれる¹⁶。」あるいは別の一文は、「われわれの南モロッコ」、「われわれのモーリタニア」という言辞のあとに、こう締めくくる。「ミシェル・ヴィユシャンジュの犠牲は、これ以上なく偉大なフランスに仕えようとする意志がなしうることの、感嘆すべき一例でありつづけるだろう¹⁷。」若者の理想、科学の殉教者は、ここでフランス植民地帝国の先兵としても称えられるのである。

そのような報道があったとはいえ、それだけであればヴィユシャンジュのことはほかの雑報に紛れ、はやばやと忘れられてしまったかもしれない。ことに当人がすでに他界していて、旅の辛苦や歓喜が直接語られることはなかったのだから。しかしながら、ミシェルはもはやいなくても、その分身たるジャンがいた。弟は兄が遺した日誌を整え、路程をまとめ、撮られた200枚もの写真をふるいにかけて、採取された植物標本を同定にまわし、みずから「まえがき」と「あとがき」の筆を執る。こうして編集された一巻は『南モロッコとリオ・デ・オロの反乱部族の地へ スマラ ミシェル・ヴィユシャンジュの旅行日誌』と題されて、1932年の終わりにプロン社から刊行された¹⁸。構成は以下の通りである。

序文

まえがき

旅行日誌

I 女に扮して

II 最初のティギリット滞在

III 最初の試み

IV 二度目のティギリット滞在

V ティギリットからスマラへ

VI スマラ

VII 帰路

あとがき

補遺

I 日誌校訂に関する注記

II 地図作成に関する注記

III 路程表

IV スマラの建造物に関する注記

V ミシェル・ヴィユシャンジュによって採取されたいくつかの植物の同定

索引

添附附録：1930年9月10日から11月16日にわたるミシェル・ヴィユシャンジュの路程図

挿入図版：53枚の写真

旅行日誌そのものを補う要素の充実に、編集者としてのジャン・ヴィユシャンジュの辣腕ぶりがうかがえる。日誌自体についても、「可能なかぎり原文に忠実に¹⁹」校訂したというジャンの注記にもかかわらず、そこからは読者に不審の念を抱かせるような文章が削除されていることが明らかになっている²⁰。けだし『スマラ』は、ジャンによってミシェルの死後2年あまりを費やして建立された「墓 tombeau」なのだというべきだろう²¹。それは、先んじて新聞・雑誌の報道が呈示していたヴィユシャンジュのイメージをより太い線でなぞり、鮮明にする墓である。

「スマラが終われば、予感では、ほくたちの青春も終わりを迎え、ほくたちは次の年代に入るのだろう [SM 143]。」日誌のなかでこのような言葉に出会う読者は、ヴィユシャンジュが青春の冒険者であることを再確認する。「太陽や疲労に襲われながら、傲然と胸を反らせ、行動の香りそのものを吸いこみ、行為の清めの火そのものなかにいて、満足している自分 [SM 136]」を意識しながら、青年はこう記す。「ついに行動のなかに、そのただなかにいる自分を感じることに、なんと幸福、なんと力、それは与えてくれるのか。苦しみや痛みや太陽や渇きにもかかわらず、頭は喜びではちきれそうだ [SM 136]。」行動によって自己充足を得ようとする若さの典型が、たしかにここにある。

その一方で、『スマラ』は、ヴィユシャンジュの行動、行為を青いエネルギーの焼尽にとどめることをよしとせず、その有用性、すなわち学術的成果を強調しようとする。そのために附録で、たどられた経路を植民地省の地理学者に、スマラの建造物が写った写真をラバトの高等研究所の研究者に、収集された植物標本をパリ自然史博物館の教授に精査してもらった、

その結果を報告しているのだ。いかんせん、それぞれの科学的価値は専門家をうならせるにはほど遠いものだったらしい。たとえば植物標本は、「残念ながら、ごく小さな断片でしか採取されえなかったもので、そのために同定はきわめて困難²²」だった。それでも、スマラ行が科学に実効のある貢献をしたかどうかは定かではないにしても、少なくともそのような貢献への意志は、あやまたず表明されていることになる。

ところで、知は所有への第一歩である。ヴィユシャンジュが欲求した科学への貢献は、植民地主義への貢献と密接している。ヴィユシャンジュがそのことについてけして無垢ではなかったことは、次のような一節に読みとれる。

偵察 raid。まさにそのような性格を、ほくは今回のスマラまでのサハラ縦断に与えなければならないし、そうしたがっている。われ知らず、とるべき経路についての関心が、自分本位のノートを書くという関心をやや上回っている。そのようなノートを諦めるわけではまったくないが、しかし、できるかぎり地形の記録をとる心づもりにも、断固としてなっている [SM 86]。

« raid » というのは英語からの借用語で、敵の領土で迅速におこなわれ、ときに本格的侵攻の露払いの役目を果たす、軍事作戦のことを指す。日本語では「急襲」にあたり、空からなら「空爆」になる。その語にここでヴィユシャンジュは、「偵察」の意味合いを与えている。サハラ縦断に「自分本位」ではない公益性をもたせるために、同胞の本格的な侵入さらには入植のための地形情報収集を、その目的のひとつに定めるのだ。また、この本のタイトルに含まれるある語からして、同様の時代性を帯びている。「南モロッコトリオ・デ・オロの反乱部族の地へ」のなかで「反乱部族」とした « les dissidents » である。「反乱 dissidence」する人々の意だが、当時、なかんずく軍隊での用法において、「dissidence」は « pacification », 「平定」と対をなす²³。つまり、植民地帝国の版図拡大のために各地を「平定」

していく側が、それへの抵抗を「反乱」と呼ぶのである。ヴィユシャンジュの冒険を冒険たらしめる必須条件である危険は、植民地主義政策が醸成する危険にはかならない。ヴィユシャンジュは「偵察」によって新たな「平定」に、奉仕し「なければならないし、そうしたがっている」のではないか。

『スマラ』は1932年の初版と大きくかたちを変えずに版を重ね、20年間でおよそ16,000部が売れた²⁴。その後は時とともに人口に膾炙することもなくなったようだが²⁵、1990年、新たな出版社を得て再刊され、それから2014年現在にいたるまで数度改版されている²⁶。興味深いのは、1932年版と比べてみると、1990年以降の版では、旅行日誌本体は同一であるものの、そのほかの点で相違があるということだ。まず補遺からは、「日誌校訂に関する注記」のみを残して、それ以外のすべてが削除されている。そしてそもそも、タイトルが同じではない。「南モロッコとリオ・デ・オロの反乱部族の地へ」は消え、『スマラ 砂漠に憑かれたある男の旅行日誌』か、単に『スマラ 旅行日誌』と題されるだけだ。つまり近年の版では、スマラ行の学術的意図や植民地主義的色調が、払拭とはいかないまでも、多分に薄められているのである。ひるがえってそのことは、1932年版が当時の関心を刺激するように周到に仕立てあげられているという事実をいっそう際立たせてくれるだろう。その本は、ミシェル・ヴィユシャンジュによる旅の記録であると同時に、ミシェルとジャンの兄弟が協力して完成させたひとつの作品なのである。その作品を、では、同時代の読者たちはどのように受け入れたのだろうか。そして、その読者のひとりであるジュネは、それをどのように読んだのだろうか。

3. 書評

『スマラ』刊行後まもなく年が明け、1933年になると、書評が新聞雑誌に掲載されるようになる。そのうちの、これから読む評者たちは、ヴィユシャンジュ兄弟の有用たらんとする戦略につれなくはしない。アンドレ・ルソーは、ミシェルが赴いた場所についてこう解説する。「それはフラン

スの平定 *pacification* が終わる場所である。そこから先は、アンチアトラス山脈とリオ・デ・オロの、いまだ反乱 *dissidence* に委ねられている土地だ²⁷。『スマラ』がその上に成立していた「平定」と「反乱」による世界の区分けが、ここで自明のこととして共有されている。他方、フランソワ・モーリヤックが次のように訴えるのは、充実した分量の図版や補遺に促されてのことではないか。「彼が命をかけてそこからもち帰ったもの、すなわちこれらの写真、これらの記録、これらの経路、こういったもののきわめて大きな学術的重要性を貶めることは控えよう²⁸。」ヴィユシャンジュは科学に貢献したのだと、どのように貢献したのかは詳らかにせず、こちらにもまた自明のこのように受け入れている。

このような態度は、しかしながら、儀礼的なものだといってよい。評するにあたっての最低限のたしなみとして、俎上に載せる相手が見てもらいたいと望んでいる顔つきにきちんと目配りするといったふうである。したがって、植民地主義の斥候、科学的知の採集者としてのヴィユシャンジュをほめそやすことは、主眼ではない。たとえばモーリヤックは、上に引いた文のあとを逆接でこうつないでいく。

とはいえ、それにしても、この殉教者と彼の目的はなんと不釣り合いだろう！ 彼が目指したのが、あの、うち捨てられ、崩れかかり、砂のなかに消えんとしている城壁だとは。[……] これこそまさに「無償の行為」だ！ ミシェル・ヴィユシャンジュは、無駄同然にみずからの命を差し出す。彼は命を失う、けれど命を救うのである²⁹。

ヴィユシャンジュの「殉教」の無益性を確認し、そのうえでそこに価値を見いだすことが、モーリヤックの論の本筋となる。モーリヤックに限らず、ほかの評者たちもまた、それぞれにヴィユシャンジュとその行動とその本から、自明な、直接的で飲み込みやすい意義とは別の意義を抽出しようとしている。そうして立ち現れるヴィユシャンジュ像は、三つに大別できるようだ。キリスト、詩人、ブルジョワ、である。

清貧の恋人

ある本についてのもっとも早い書評は、その本自体のなかに組み込まれていることがある。著者や編集者以外の第三者による序文や解説である。『スマラ』にも「序文」が、ポール・クローデルから寄せられていた³⁰。死の床でミシェルが、「クローデルのように」カトリックに全幅の帰依をする、と回心していたためだろう³¹、ジャンがつてをたどってこの大作家に依頼したのだった。1932年1月16日のクローデルの日記には、こう記されている。

ジャン・ヴィユシャンジュ博士が彼の兄ミシェルの旅行日記のタイプ原稿を送ってくる。服従に抗うサハラでスマラの探査をおこない、帰路、25歳 [ママ] で衰弱と赤痢のために命を落とした人物。出発前に『縞子の靴』を読み、衝撃を受けていた³²。

その原稿を読み、およそ半年後に、フランス大使としての駐在地ワシントンで、クローデルは「序文」を書きあげた。

「われらの主が十字架の上で死をお迎えになる前に、愛弟子にそれを伝え」てこの方、「清貧にはつねにそれを熱烈に、忠実に愛する者たち *amants* がいた [SM VII]」。そう切り出すと、クローデルはその「清貧を愛する者たち」を列挙していく。砂漠の師父たちも、聖フランシスコも、ドンキホーテも、みな、「おのれの家族、仕事、さらには命よりも、清貧の苦きパンを食み、清貧のかたわらで汚泥に塗れて眠るという恩恵のほうを選んだ [SM VII]」。また、レンブラントやコロンプス、ナポレオンやランボーも、「分別ある投機家 [SM VII]」として清貧を求めたのだという。彼らの晩年の不遇を、すべてをそのためになげうって獲得した清貧の境地と見てのことである。

そして、このキリスト教世界の偉人たちのリストに、ミシェル・ヴィユシャンジュの名前が加えられる。

しかしながら、この若者、わたしがその発見と死の日記を読者に紹介する役目をおおせつかったこの若者が、地図の上の人跡未踏のただなかに、見えるか見えぬかのイタリック文字でふたつの音節、スマラと書かれているあの場所を欲した、そのとき以上に激しく、やみくもな心をもって、愛しい人 *maîtresse* が約束してくれた逢瀬に駆けつけた恋人 *amant* は、かつていなかった。何も彼を怯ませはしない、疲労、危険、飢え、渇き、粗末な食事、腐った水、蚤や虱、砂、そして地獄の業火といえども [SM VIII]。

「愛しい人 *maîtresse*」とは清貧のことであり、「恋人 *amant*」とはそれを愛する者にほかならない。ヴィユシャンジュは、キリストの直系の弟子、しかも誰よりも熱烈に無一物に身を投じた弟子となる。

寡黙な英雄

クローデルとは異なる角度からキリストとヴィユシャンジュの姿を重ね合わせていくのは、フランソワ・モーリヤックである。

「おしゃべりどもと英雄」というその記事の題名が、内容の的確な骨子になっている。「おしゃべりども」とはたとえば政治家たちのことで、「議会という水槽のなかにいる、あの奇妙な種、口をきく無定見な両生類、資本主義は1世紀半をかけてあんなものを作ったのだ³³」と、モーリヤックは慨嘆にたえない。そんなときに慰めてくれるのがミシェル・ヴィユシャンジュの存在だった。「彼は黙り、そして彼は行動する。」すなわちヴィユシャンジュは、「おしゃべりども」とは対蹠的な寡黙な「英雄」である。

その英雄のおかげで、フランスの威信は凋落のきわで踏みとどまることができる。「悪い木だったらこのような果実を实らせはしまい。この若き死者がいてくれれば、わたしたちのフランスへの信頼はいささかも失われないだろう。」英雄の存在意義は、しかも、フランスという枠に収まるものではない。

じつのところ、黙って行動する者たちは、口だけで自分の責任では何も
しない者たちを助けているのだ。そういう英雄たちがいるから、わたした
ちの卑屈さはなんの証明にもならず、わたしたちはそれを論拠にして
人間を貶めないで済む。20歳の若者たちが世界のあらゆる王国のなかか
ら飢えを、渴きを、病を、死を選び、全き無一物に到達してようやく生
きた神の尊顔を拝するがゆえに、ほかの者が浮き世の栄達のなかでぬく
ぬくと、安心しきって神の教えを説こうが、かまわない。

英雄は人類全体の価値も保証してくれるのだ。そして、それが人間と神
との絆の保証でもあるのならば、英雄はにわかに宗教的威光をまとう。わ
たしたちは知っている、「英雄たちがそこにおいて、彼らが均衡を保つ重し
となり、埋め合わせをし、贖う」ことを。英雄はわたしたちの代表であり、
身代わりであり、贖罪の子羊である。英雄は、ミシェル・ヴィユシャンジュ
は、つまり、キリストである。

すでに見たように、モーリヤックはヴィユシャンジュのスマラ行が無益
であり、「無償の行為」であると考えていた。しかし、その冒険、とりわ
けその死は、表面的な有用性を超越した、抽象的で、絶対的で、霊的な意
味を有する。記事は次のように結ばれる。「スマラは結局口実でしかない。
キリスト教の英雄はつねに、わたしたちが救われるために死ぬのだ。」奇妙
な書評ではないか。評する本の主題を否定することで、その本を別の、高
次の可能性に開こうとするのである。

冒険と詩

文芸評論家のアンドレ・ルソーもまた、同時代の政治的状况にうんざり
し、『スマラ』を読むことで救われているひとりである。

この三日間というもの、ミシェル・ヴィユシャンジュの日誌を読んで
は、また読み返している。政治と議会の世界のありさまがわたしたちを
どっぷりと浸からせる、欲とエゴと卑屈が充満した空気に吐き気を催し

て新聞を置くなり、その本をまた手にするのだ、まるで傷に当てるための焼灼器をとるように³⁴。

ヴィユシャンジュはやはり英雄であり、しかしながらここでは、彼がその双肩に人間の救済という重荷を担うことはない。「わたしたちには英雄が、かつてないほどに偉大で美しい英雄たちがいる。いまこそわたしたちの社会が、そのような巨人たちにふさわしくない社会であることをやめるべきだろう。」殊勝に、というべきか、ありきたりというべきか、英雄を範としてよりよい社会を築いていこう、と訴えるのである。

ルソーによる評の独自性は、むしろ、文学との関係においてヴィユシャンジュの行動をとらえようとする点にあるだろう。

ミシェル・ヴィユシャンジュも詩人であり、彼の本は一篇の英雄的精神の詩なのだ、「詩 *poésie*」という言葉の形式的意味ではなく、その本質的な意味にこだわり、詩とは何よりもまず「創造」のことだと理解するのならば。何かをなすこと、ひとつの行為を完遂すること、その実現を阻む数々の困難からその行為をもぎ取ること、それがミシェル・ヴィユシャンジュの望んだことだった。それが彼の日誌が刻々とわたしたちに描き出してくれる冒険の意味である。

「詩 *poésie*」がポイエーシスにまで遡り、その範疇にヴィユシャンジュの行為を回収する。冒険は詩的創造となり、英雄は詩人になる。逆にいえば、ヴィユシャンジュによって文学の領分が押し広げられ、活性化されるのだ。この詩人は、「これほど多くの価値が損なわれている時代にあって、文学にながしかの艶を取り戻させ」、「文学的使命から出発して、ついには、霊的、精神的生活の峻厳なる最高峰を一步一步登っていく」。科学や植民地主義の開拓者ではなく、文学の開拓者に、ヴィユシャンジュは任じられている。彼に人間の再生がかかっているのだとしても、それは文学の再生を通してこそ果たされる。

文学の裏切り

ルソーと同じように文学を関心の中心に据えながら、しかし、ヴィユシャンジュの旅に行動による文学への貢献を見るのではなく、それは「行動のための文学の犠牲 [616]」なのだと言破するのは、のちに自身も作家、戯曲家となるティエリ・モルニエである³⁵。ミシェル・ヴィユシャンジュは文学を更新したのではなく、文学を棄捨したというのだ。「作家のもっとも崇高なる務めはおそらく書くこと」であり、「冒険を選べば、詩人や哲学者は人を失望させる [616]」のではないか。厳しい問いが発せられる。

この卓越した探検家に彼にふさわしい賛辞を惜しみなく贈ったあと、賞賛を欠けるところのないものとする前に、疑ってみるべきだ。彼の英雄的行動には一片の倦怠が、すなわち、ずいぶんうがった見方をするなら、ある種の逃亡が、混じってはいなかったか、と [617]。

ヴィユシャンジュはなぜ文学に倦んだのだろうか。どのような文学から逃げたというのだろうか。

モルニエの意図はヴィユシャンジュを指弾することにはない。詰問は、文学を捨てたヴィユシャンジュではなく、捨てざるをえなくさせた文学に向かう。「彼は単に何かのために選んだのではなく、何かに抗して選んだのもあった [617]。」何かに反旗を翻すためにヴィユシャンジュがスマラへの出発を選択した、その何かとは、文学の混迷である。

同時代の文学が根本的に無能で自分の奥底にある衝動に意味を与えてくれないということ、生について、その機能について、その永遠の欲求について何ひとつ知らないということ、そのことを発見する者が、別の場所を求めるのは、つまるところ当然である。十分な生の理由をどこにも見いだせないミシェル・ヴィユシャンジュは、自分自身でそれを創造することを余儀なくされようとしていたのだ。じつに、彼が文学を裏切っ

たのではなかった。文学が彼を裏切ったのだ、同時代のすべての人間を裏切っていたように [617]。

ヴィユシャンジュの思いを代弁しているかどうかはもはや怪しく、むしろ筆者自身がおのれの考えを、文学の裏切りに対する憤懣を、開陳しているかのようだ。舌鋒は鋭く、若者を「欺く以外に満足させることができない師 [618]」としてクローデルやジッドが [615]、さらには「無意識や阿片や革命の神話 [618]」にすぎる多くの知識人たちが、槍玉に挙げられる。スマラ行の淵源を探ることを端緒にして、あるいはそれを口実として、「不毛なまでに抽象的になり、内輪うけのいくつかのいかがわしい遊戯に墮し、まがいものの詩で飾りたてられた」文学、「生きることに背を向けていた [617]」文学の破綻が、剔抉されるのである。

清新な欲求と真正の素材を手に入れて冒険から帰還を果たしたのならば、ヴィユシャンジュはふたたび文学を執筆したのかもしれない。しかし惜しむらくは、「死が作品にとって替わった [618]」のだった。

ブルジョワの子

モルニエが「無意識や阿片や革命の神話」を弄しているといつて批判する文学者にシュルレアリストたちが含まれていることは、1930年代初めという時代を考えても、まずまちがいないだろう。じつは、そのうちのひとりフィリップ・スーポーも『スマラ』を書評している³⁶。そもそも、これまで見てきた記事は、クローデルの序文を除いて、『レコー・ド・パリ』、『ル・フィガロ』、『ラ・ルヴュ・ユニヴェルセル』という保守系もしくは国家主義的な媒体に掲載されたものだった。スーポーが寄稿しているのは共産党に近い雑誌『ウーロップ』であり、『スマラ』の多面的な受容を知るうえで貴重な事例であるはずだ。

はたして、スーポーはヴィユシャンジュへの絶賛に与しない。それどころか、その絶賛を支える「英雄信仰、個人主義の宗教 [607]」を審問に附すのである。まず、死を恐れないからこそヴィユシャンジュは英雄なのだ

が、いったいそれはひとりの青年に慥すべきことなのか。「最初に読むとまことに簡潔なその調子に心を動かされるこの日誌を読んで、何よりも面食らうように思われるのは、ミシェル・ヴィユシャンジュが命に関心がないように見えることである [607]。」しかも、自分の命には関心のないヴィユシャンジュは、おそらく他人にも無関心で、誰かの役に立つなど思いもよらない。スポーはヴィユシャンジュの行動の学術的価値について儀礼的にもちあげたりはしないが、そんなことはヴィユシャンジュも期待していないという。「彼は、自分の探検が実利などほとんどないに等しいスポーツの快挙にすぎず、その未知の土地からもち帰れるものにはどれも学術的価値などまったくないだろうということを、十二分にわかっている [607]。」自分以外の社会や世界への貢献は、ヴィユシャンジュにとってまさに他人事なのだ。彼は「同時代の人間の日増しに膨らんでいく不安についていっさい知らず」、「自分をつき動かす気力を、個人的な榮譽よりもっと高邁な、別の目的のために傾けることもできたかもしれない [607]」とは考えもしない。彼が欲しているのはただひとつ、榮譽のほかはない。「このブルジョワ青年は称えられることを求めている。彼は自分の勇気の対価を要求している [607]。」祭りあげられた英雄を皮剥けば、徹底的な、狂信的なまでの個人主義者が現れ、おめでたい礼賛者に冷や水を浴びせるのである。

スポーの筆は階級闘争の熱を帯びている。なぜなら、ヴィユシャンジュの行動は、「ブルジョワの若い世代の精神 [606]」を知るには格好の教材だからだ。命よりも榮譽に執着するこの個人主義者は、ブルジョワジーという階級が生んだ鬼子ということになるだろう。

要するに、この一種の自殺の責任を問われるべきは、この浅はかで軽はずみな若者ではなく、彼が受けた教育である。同時代の人間から引き離され、特権階級の一員とされる彼、彼はブルジョワであり、「エリート」に属し、みずからの先入観に凝り固まって記録更新だけを考えて、命の危険も省みず、一瞬たりとも良心の呵責にとらわれることがない。気前

よく自分の人生を何かに捧げたかったのならば、どうして彼は、自分の周りのすべてと、ブルジョワジーと、自分の階級の盲目と、戦おうとは考えなかったのか [607]。

ヴィユシャンジュの軽挙妄動の責任は彼の精神を涵養したブルジョワ階級にあり、しかしひるがえって、その特権階級を打破しようとはしなかったことの、英雄ではあっても革命家にはなりえなかったことの責任は、ヴィユシャンジュにある。いや、そのように難じるのは酷にすぎるのかもしれない。そこにいるのは、「知らない公園を見つけに行く子ども [606]」、自分が育った階級の甘やかな膝下を離れることのできない子どものひとりなのだから。

書評の名を借りて保守的なあらゆる価値を痛撃していくスーパーは、ヴィユシャンジュの厳粛な末期まで揶揄する。

したがって、死に臨んで彼が回心したのも当然である、天国と永遠の生が約束されるのだから。

「クローデルのように」、と彼は弟に書く [ママ]。むべなるかな [607]。

回心もまた、自分だけが神に救われようとする、個人主義的な、わがままな子どものようなふるまいでしかないというのか。

かくして、ミシェル・ヴィユシャンジュは求道者であり、文学者であり、資本家である。『スマラ』は、清貧への誘いとなり、英雄の叙事詩となり、階級社会の鏡となる。いくつかの評を読んだだけでもその多彩さが明らかなヴィユシャンジュの受容のなかで、それではジュネの「イビスへの手紙」は、どのような色を放つのだろうか。

(続く)

註

- 1 Jemia et J. M. G. Le Clézio, *Gens des nuages* (1997), photographies de Bruno Barbey, Gallimard, coll. Folio, 2010, p. 47.
- 2 Jean Genet, *Notre-Dame-des-Fleurs* (1943), Gallimard, coll. Folio, 1976, p. 351-352. なお、本稿での引用はすべて、既訳があるものについてはそれに多くを教えられながら、筆者が訳出したものである。
- 3 フーコーが、ジュネとの関係はさておき、研究対象として魅力に乏しいわけではない。1888年に刊行されたその旅行記の再刊を紹介しておく。Charles de Foucauld, *Reconnaissance au Maroc. Journal de route*, conforme à l'édition de 1888 et augmenté de fragments rédigés par l'auteur pour son cousin François de Bondy, Clichy, Éditions du Jasmin, coll. Le Simoun, 1999.
- 4 Jean Genet, « Lettre à Ibis », *Le Figaro littéraire*, supplément hebdomadaire du *Figaro*, 25 août 2005, p. 3.
- 5 Jean Genet, *Lettres à Ibis*, présentation et notes de Jacques Plainemaison, Paris, Gallimard, coll. l'arbalète, 2010, p. 41-47.
- 6 ジュネとイビスの関係、また「イビスへの手紙」については、以下を参照。Jacques Plainemaison, « Présentation », dans Genet, *Lettres à Ibis*, *op. cit.*, p. 7-14 ; Albert Dichy et Pascal Fouché, *Jean Genet. Matricule 192.102. Chronique des années 1910-1944*, Gallimard, 2010, p. 235-240.
- 7 Genet, *Lettres à Ibis*, *op. cit.*, p. 41.
- 8 より詳細で、客観的なミシェル・ヴィユシャンジュの伝記としては、以下を参照。Antoine de Meaux, *L'Ultime désert. Vie et mort de Michel Vieuchange*, coll. d'ailleurs, Phébus, 2004.
- 9 Jean Vieuchange, « Introduction », dans Michel Vieuchange, *Smara. Carnets de route*, publiés par Jean Vieuchange, préface de Paul Claudel, Payot, coll. Petite Bibliothèque Payot, 1993, p. 5.
- 10 *Ibid.*, p. 8.
- 11 Artigny, « Terres inconnues », *Le Figaro*, 27 décembre 1930, p. 2.
- 12 Jean Vieuchange, *op. cit.*, p. 10.
- 13 Michel Vieuchange, *Smara. Carnets de route*, publiés par Jean Vieuchange, préface de Paul Claudel, Payot, coll. Petite Bibliothèque Payot, 1993, p. 23. これ以降、この文献への参照は、本文でも注でも SM の略号とともにページ数のみを記す。
- 14 当時のミシェル・ヴィユシャンジュに関する記事、また先で扱う『スマラ』の書評については以下から多くの情報を得て、ヴィユシャンジュ受容のありようについてもおおいに啓発された。本稿はその資料群を

- あらためて読み直し、整理しようとするものである。Marie Gautheron, « Michel et Jean, Arthur et René : écrire le désert avec son corps », *L'Imaginaire du désert au XX^e siècle*, études réunies par Jaël Grave, Paris, L'Harmattan, 2009, p. 29-59 ; Meaux, *op. cit.*, p. 25-28.
- 15 Jean Vincent Bréchignac, « L'émouvante figure de Michel Vieuchange qui força le secret du Rio de Oro », *L'Intransigeant*, 28 décembre 1930, p. 2.
- 16 « Dans le Rio de Oro. Un Français aurait réussi à pénétrer dans la ville mystérieuse de Smara », *L'Action française*, 24 décembre 1930, p. 2.
- 17 Maurice Bernart, « L'exploration de Michel Vieuchange. De Tiznet à Smara », *L'Afrique française*, t. XLI, 1931, p. 727.
- 18 *Chez les dissidents du Sud marocain et du Rio de Oro. Smara. Carnets de route de Michel Vieuchange*, introduction et appendices par Jean Vieuchange, préface de Paul Claudel, Plon, 1932. 筆者が実際に参照することができたのは、この初版と大きな異同がない1937年刊行の第19版である。
- 19 Jean Vieuchange, « Note sur la reproduction des carnets », *SM* 259.
- 20 Gautheron, art. cit., p. 39-42を参照。
- 21 *Ibid.*, p. 39を参照。
- 22 Auguste Chevalier, « Quelques-unes des plantes récoltées par Michel Vieuchange » dans *Chez les dissidents du Sud marocain et du Rio de Oro. Smara. Carnets de route de Michel Vieuchange* (1932), 19^e édition, Plon, 1937, p. 239.
- 23 Bernadette Rey Mimoso-Ruiz, « Le voyage au bout de soi : Michel Vieuchange (Smara, 1932) », *Horizons Maghrébins. Le droit à la mémoire*, n° 54 : Voyages au Maghreb, 2006, p. 109を参照。
- 24 Meaux, *op. cit.*, p. 26, note 2に拠る。
- 25 たとえば1955年刊行の『探検の世界史』(*Histoire universelle des explorations*, dir. L.-H. Parias, préface de Lucien Febvre, t. IV : Époque contemporaine, par J. Rouch, Paul-Émile Victor et Haroun Tazieff, Nouvelle librairie de France)には、シャルル・ド・フーコーについての記述がある一方で、ミシェル・ヴィユシャンジュの名前は見あたらない。
- 26 以下が、1990年以降のすべての版である。*Smara. Carnets de route d'un fou du désert*, Phébus, 1990 ; *Smara. Carnets de route*, Payot, coll. Petite Bibliothèque Payot, 1993 (*SM*) ; *Smara. Carnets de route d'un fou du désert*, Phébus, coll. libretto, 2004 ; *Smara. Carnets de route d'un fou du désert*, Libretto, 2013. 本稿執筆にあたっては、参照の容易さを考慮してこのなかから底本を選ぶことにしたが、そのうちの1993年版に定めたのは、この版にのみ貴重な資料であるジャン・ヴィユシャンジュによる「まえが

- き」が再録されているからである。
- 27 André Rousseaux, « Le poème de l'héroïsme », *Le Figaro*, 21 janvier 1933, p. 5.
- 28 François Mauriac, « Les bavards et le héros », *L'Écho de Paris*, 11 février 1933, p. 1.
- 29 *Ibid.*
- 30 Paul Claudel, « Préface », *SM VII-IX*. なお、この序文には以下のような再録がある。「Smara », *Figures et Paraboles* (Gallimard, 1936), dans *Œuvres Complètes*, t. V, Gallimard, 1953, p. 225-227.
- 31 Jean Vieuchange, « Postface », *SM 257*.
- 32 Claudel, *Journal*, t. I, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, 1968, p. 987.
- 33 Mauriac, art. cit. この項の引用はすべてここからおこなう。なお、この記事には以下のような再録がある。「Un autre jeune est mort », *Journal I*, dans *Œuvres complètes*, t. XI, Arthème Fayard, 1952, p. 15-17.
- 34 Rousseaux, art. cit. この項の引用はすべてここからおこなう。
- 35 Thierry Maulnier, « Littérature et Action : Michel Vieuchange », *La Revue universelle*, t. LII, n° 23, 1^{er} mars 1933, p. 615-618. この項の引用はすべてここからおこない、本文ではページ数のみを記す。
- 36 Philippe Soupault, « Compte rendu », *Europe*, t. XXXIII, n° 132, 15 décembre 1933, p. 606-607. この項の引用はすべてここからおこない、本文ではページ数のみを記す。

本稿執筆にあたっては平成26年度慶應義塾学事振興資金による補助を受けた。ここに記して感謝する。